溺れる、連鎖

miz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
溺れる、連鎖

【Ｎコード】
Ｎ３５２０Ｘ

【作者名】
ｍｉｚ

【あらすじ】
はじめに言っておきますがこれは誰が犯人だとか、どうしてこのようなことが起こったのかを供述するわけではありません。ましてや僕の罪を軽くしたいわけでもありません。ただ真相をお話しするだけです。
”××山荘殺人事件”の犯人として捕まった槇は三つの事件と三人の人間について語りだす。関連性のない事件だと思われていた三つの殺人事件はやがて連鎖し、真相が見えてくる―――

（1）始まりの事件はどちら？

7月29日

これはこれは。わざわざお出でいただきありがとうございます。まあお出でいただかなければこうして会えないのですからショウガナイですよね。

あれ？笑えませんか。ちょっとしたジョークだったのですが……。

そんな恐い顔しないで下さい。男前が台なしですよ。

……もしかして僕のこと覚えていませんか？ああ、名前ですか。はじめてあなたと出会ったときは違う名前を名乗っていましたものね。槙（まき）、これは偽名です。

怒っているのですか。でも僕がこうなることはあなたが一番分かっていたはずだ。そうでしょ？でなければ僕はあなたをこうしてお呼び立てしませんよ。

さあ本題です。僕があなたを呼んだのは”××山荘殺人事件”についての真相をお話しようと思ったからです。真相。そう、真相。真実ですよ。

はじめに言っておきますがこれは誰が犯人だとか、どうしてこのようなことが起こったのか、つまり動機を供述するためではありませんし、ましてや僕の罪を軽くしたいわけでもありません。変な勘違いはしないで下さい。ただあなたの胸に留めておいてくれればいいのです。間違っても口外はしないで下さいね。

だったらなぜ話すのか。そうですね。数週間前に”××山荘殺人事件”の唯一の生き残りの青年が自殺したと新聞で読みましてね。彼がいなくなったのであれば黙っておく必要はないと思ったからです。でなければ彼が浮かばれないと思ったからです。

僕は彼を愛していましたからね。ゲイ？いえ、それとはちょっと違います。そういう愛ではありません。いやもうそれはいいでしょう愛について談義したいわけではありません。

しかし、暑いですね。あなたと出会ったころを思い出します。あなたと出会ったころもこんな蒸し暑いときでしたね……。
そうだ。今から思えば”××山荘殺人事件”は１２年前に起きた”××通り魔連続殺害事件”からはじまったように僕は思います。つまり僕とあなたが出会った、あの事件です。
”××通り魔連続殺害事件”の詳細を教えていただけませんか？あの頃交番勤務だったあなたが今はこうして立派な刑事になったのです。以前よりかは事件の詳細が分かったのではありませんか？もちろん話せるところだけで結構です。

お願いします。

（2）××通り魔連続殺害事件

7月19日

夕日が射しこむ学校の屋上が好きだ。フェンスにもたれ足を投げ出し目をつむり何も考えずただ風を感じる。小さく風が吹くと長い前髪が揺れた。たぶん他人が見たらうっとうしい髪型なんだろう。クラスメートに鷲掴みにされ「うっとうしい」と言われた。そういうヘアースタイルが好きなのかと聞かれればそういうわけじゃない。どうでもいいのだ。

目をつむっているとうるさいセミの鳴き声と先ほどまで僕を殴っていたクラスメートの話し声が聞こえた。

――――なぁあと何人殺されると思う？

――――オレ隣に住んでるヤツが怪しいと思ってるんだ。

楽しそうに話すヤツ。推理をしだすヤツ。彼らが話しているのはこの町で起きた連続殺害事件のことだ。この一ヵ月で二人もの女性が殺された。みんなが顔見知りのこんな小さな田舎町で殺害事件が起こるだなんて誰も想像していなかっただろう。もちろん僕もそのうちの一人なのだが。

下校時刻ぎりぎりまで屋上で過ごしてから帰路に着くようにしている。クラスメートに会うのも煩わしいし家にいるのも好きではなかった。帰宅路を歩いているといつもなら人の気配がする住宅街も殺害事件が起こってからは随分と静かになってしまった。みんなで助け合って生きているような温かい町だったのに寂しいもんだな、とレクイエムのように鼻歌を歌った。短い住宅街を抜けると小さな駅がありその横に交番がある。一人の男が立っていたがいつもの年老いた警察官ではなかった。今回のことで若い警察官に交代したのだろうか、とつい見すぎてしまったのか若い警察官は「おかえり」と僕に笑いかけた。ウソっぽい笑顔だった。だけどこういう人たのめに”好青年”という言葉があるのだろうと理解した。小さくお時儀

をしてすぐさま過ぎ去った。

「一ヵ月も経つのに犯人が捕まらないなんて！」

母は怒るように新聞を弾いた。テーブルでご飯を食べる僕、その前で話す母。いつもの光景だった。

「別にこの町でなくても仕事はできるし引っ越そうか？」

母の話はつづく。返事もしていないのに。疑問形で投げかけてくるくせに返事を待たず母は話しをつづける。父が母と離婚を決めたのもなんとなく理解できた。母は話しだすと止まらない。自分が納得できるまで話しはどんどんと進んでいく。どんどんどんどん。父がいたころも母は僕たちを取り残していった。僕たちと母のあいだにできた距離は少しずつだけどでも確実に大きな大きなものになっていき、そして修復不可能なまでの距離になってしまったのだ。

7月20日

顔を殴られた。体を殴られたり蹴られたりすることはよくあったが顔は初めてだった。容赦がなくなっていくんだな、と他人のようにぼんやりと考えていた。屋上で過ごす放課後唇の端をさすりながら溜息をついた。もたれ掛かっているフェンスが壊れてこのまま一緒に落ちてしまったらどうなってしまうのだろう。落っこちる自分を想像する。まず頭が割れて体が地面に叩きつけられ骨が砕け肉が飛び散るのだろうか。想像するとぞくぞくした。

———ガタン、と扉の開く音がしたので咄嗟に身構えた。開いた扉に目をやると同じクラスの女子が脅えた目でこちらを見ていた。この時間に屋上へくるヤツは今までいなかったので少し驚いた。

「あっ……　ごめんなさい」

彼女はか細い声でつぶやいた。

「梶（かじ）……く、ん？」

居座る気なのか、と言うように睨みつけると彼女は泣き腫らした目

をしていた。そういえば最近クラスの女子から無視をされていたことを思い出した。ただのケンカだと思っていたがケンカにしては期間が長いような気もした。
「唇……　切れてるよ？」
はい、と彼女はハンカチを差し出したが目線をそらした。無言で立ち上がりその場を去ろうとしたが腕を掴まれ制止された。
「待って……！　……あたし、あたし、」
彼女は興奮しているのか無意識のうちに僕の腕を力いっぱい握りしめていた。そして溜まっていたものを全て吐き出すようにまくしたてた。
「しにっ　死にたいんだっ　梶くんは、どうして死ななかったの！？」
”どうして死ななかったの”その言葉を聞いて彼女は僕を探してここまで来たのだと分かった。彼女はたぶん、僕の手首に残るリストカットの傷跡のことを言っているのだろう。
一度だけ自分の手首を切ったことがある。学校に馴染めない自分。いつのまにか始まった暴力。何も考えず躊躇うこともなく簡単に手首を切った。だけど切った途端なんだか違う、と感じた。僕は死にたいとは少し違う感情を持っている。でもそれが何かは分からなかった。ただ思った以上に興奮していたようで深く切ったつもりはなかったが血が止まらずどくどくと流れつづけた。その流れる血をながめながら心の奥底で「失敗した」と囁く冷静な自分がいた。失敗したのは深さではなく母だった。案の定病院に運ばれた僕の隣で母は狂うほど泣き叫んでいた。「どうして」と母と医者にも聞かれた。もとっもらしい嘘をついた。「父がいなくて寂しかった」半分ウソで半分ホントウだ。
「なに？お前死にたいの？」
彼女は深刻そうな顔をして頷くので鼻で笑ってしまった。
「クラスの女子に無視されてるだけで？くだらねぇ」
「……でも、でも梶くんも死にたいからリスカしたんでしょう？」

「はっ　お前と一緒にすんな」
そう吐き捨てて屋上を後にした。
階段を下りている途中、母を思い出していた。この町に引っ越してきたころ隣に住むおばさんは「困ったことがあったら言ってね」と言った。優しくて親切そうな人だった。だけどどうやら母は何が気に食わなかったのか「お節介ね」とおばさんが帰った途端に冷たい声で吐き捨てた。そのときの母の冷たい声と彼女に吐き捨てた僕の声が似ていたような気がした。

学校を出ると夕日が沈みかけていた。綺麗なオレンジ色をした空が黒く塗りつぶされていくような不気味な空だった。
住宅街にさし掛かる前に木々や雑草が生い茂った薄暗い場所がある。昨日と同じように鼻歌を歌いながら歩いているとそこからかさかさという小さな音とともに僅かにに雑草が揺れていた。風か何かだろうと思っていたがその音と揺れはだんだんと大きなものとなっていった。すると突然生い茂った雑草の中から少し太ったガタイのいい男が息を切らしながら現れた。顔は見えなかったが少し慌てているようにも見えた。男はそのまま僕の存在に気づかず逆の方向へと歩いて行った。
僕は動けず心臓はどきどきと早く脈打っていた。心のなかで「もしかして」という予感があったからだ。
———もしかして。もしかして。もしかして。
男が現れた草むらへ近寄って見ると生い茂った草むらに男が通ったであろう道が微妙に出来あがっていた。辺りを見回し誰もいないことを確認してから草むらへ一歩、足を踏み入れた。
———もしかして。もしかして。もしかして。
このとき自分の口角が上がっていることに気づいていた。一歩、一歩、歩みを止めずに男が通ったことで出来た道を歩いた。草が踏まれ青臭い独特の臭いがした。この草むらはこの町に唯一ある小さな公園の裏手へとつづくのだろう。一歩、一歩、いつの間にか早歩き

になっていた。
するとぴしゃっと何かが跳ねる音がした。真っ赤。そんな言葉が頭に思い浮かんだ。
女の人が仰向けになって倒れている。腹部からは赤黒い血だと思われるものが飛び散っていた。ああ、残酷。残酷だ。もう少しで内臓が見えてしまいそうなほど腹がへこんでしまっている。息が荒くなった。
咄嗟に膝をつきカバンで下半身を隠した。自分の息遣いが真横で聞こえる。はぁ。はぁ。はぁ。はぁ。そっとカバンを持ち上げ下半身を確認した。
———興奮している……。
何で。何で。突然視界がぐにゃりと曲がり倒れそうになる体をなんとか堪えた。死体と思われる女性の唇が目に入った。口紅を塗っている。真っ赤な口紅。でもそれは綺麗に塗られているものではなく興奮したように力強く、唇からはみ出してしまっていた。顎までつづく赤い口紅。自分の指が女の人の唇に伸びていくのが分かる。はぁ。はぁ。はぁ。はぁ。うっと吐き気襲った。慌ててその場から離れ吐かないよう手で口を押さえ走った。走って走って走っているあいだも死体のことを考えていた。
———死んでる。死んでる。死んでる。
人が死んでる。
元いた道に戻ったあともそのまま走りつづけた。
彼女は刺されていた。何度も何度も刺され腹がへこみ中身が見えそうになるまで。その場にうずくまりとうとう吐いた。そして電源が切れたかのように一瞬で視界が真っ黒になり消えてしまった。
誰かの声がした。でもだんだんと遠くなっていく。意識が遠くなっていく。助けて、誰か。暗くて恐い。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3520x/

溺れる、連鎖

2011年10月25日03時06分発行